

第2回大山学講座講演会 「大山の祭り・行事」を開きました!!

大山寺と大神山神社奥の宮には、古くから伝わる年中行事が数多く残っています。今回は、そんな神事や行事などの信仰をとおして、大山の素晴らしさを知っていただこうと、7月4日（土）に、鳥取県立博物館学芸員の福代 宏さんを講師にお迎えして、標記の講演会を大山公民館で開きました。講演会は、7月14、15日に行なわれる「もひとり神事」に先立ち、それへの関心も高める目的で開きました。



▲ 講演会のようす

講演会では、大山に伝わる神事や行事の全般的なことを説明した後、主に、「御幸祭」と「もひとり神事」について、その由来や移り変わりについて、映像や雑学などを交えながら講演され、参加者は熱心に聞いておられました。

当日は、突然の大雨の降る天候にも関わらず、町内外から約40人の参加があり、盛況な講座となりました。

大山寺今昔 ワンポイント講座（三）

～ 「弥山禪定」 と 「もひとり神事」 ～

「もひとり神事」は、七月十四日の夕方から十五日にかけて、大神山神社奥の宮で毎年行なわれています。「もひ」とは、水を入れる容器の事であり、それが転じて水を表す古語でありますので、お水取りということとなります。

真夜中に大神山神社奥の宮を出発して、行者登山道（現在の元谷から登る登山道）から大山頂上を目指します。頂上間近でご来光（晴天の場合）を迎え、早朝に、石室の前にある梵字ヶ池の水を汲み、その周辺でヒトツバヨモギを刈り取り、下山します。そして、その水とヒトツバヨモギは、大神山神社奥の宮の参拝者に分け与えるという神事です。

この神事は、もとは「弥山禪定」と言い、大山寺が行なっていた年中行事でありました。「禪定」とは、山の頂上を禪頂といい、そこまで至る修行のことを言います。

弥山禪定は、旧暦五月朔（ついで）から写経が始められ、旧暦六月十四〜十五日に、大山に登り、山頂下の銅壺に納経するという行事でありました。それが、明治八年、大山寺号の廃絶（神仏分離政策と廃仏毀釈による）により、仏教的な祭事を抜いて、大神山神社に引き継がれました。この



浄水器
貞享2（1685）年

弥山禪定のお水取りに使用した容器が、大山寺霊宝閣に残されており、（写真）。真ん中には、「弥山禪定浄水器」、右端には「貞享二乙巳年」（一六八五年）の年号が書かれています。これは阿伽桶と考えられており、仏様に供える水を阿伽（水）と言い、それを入れる桶であります。もともとの弥山禪定には、写経や頂上への納経と同じくらい、頂上の霊威ある水を、仏様にお供えるために汲むことも、重要な目的だったのではないのでしょうか。だからこそ「もひとり神事」という形で、現在まで引き継がれたのではないのでしょうか。

表面の塗料が剥げ落ち、古びた容器ですが、当時の信仰の真相を今に伝える重要な証拠品であり、その裏に隠された歴史を想像させてくれる逸品です。

（社会教育課文化財調査班）